

奥深い自然と歴史のなかで 自分を見つめ直す熊野

クマノタイケンキカク

くまの体験企画



尾鷲の町や海を見晴らす馬越峠の展望台。開放的な眺めも古道歩きのみ楽しみだ。

いにしえに 想いをはせる古道旅

江戸時代の美しい石畳が残る馬越峠を、ほぼ10年ぶりに紀北町から登った。石畳を少しずつ登るにつれ、国道42号を走る車の音が静かになっていき、やがて野鳥のさえずりや沢水のせせらぎだけが聞こえるように。「小股だと登りやすいですよ」と、一緒に登ってくれた「くまの体験企画」の内山裕起子さん(43)が教えてくれた。石畳は、江戸時代の女性が着物でも歩きやす

いように敷かれている。そのうえ石畳は水平ではなく、山の斜面と同じ方向にやや傾いているので、スムーズに歩きやすい。これは周りの山に江戸時代からヒノキが植林され、伐った木を下ろす作業がしやすいように傾けて敷いたのだという。

峠は急峻なのに心地よく歩けるのは、石畳と美しい眺めのおかげ。ヒノキ林に青々と繁茂するシダもその一つだ。温暖湿潤な熊野古道沿いはシダが多く、調査に訪れる植物学者も「シダ王国だ」と語る。「いま見えている範囲にもいろいろありますよ」と内山さん。岩の上にあるヒトツバは利尿作用があつて尿管結石などに効き、昔から薬草として使われてきたという。一番多いウラジロを手にとって「なぜウラジロというのでしょうか」「なぜ正月に飾られるのでしょうか」と聞かれる。ウラジロに昔の人がどのようにめでたさを感じていたのかうかがうと、

ヒトツバ。暖地性の常緑の植物は色あざやかで、北国から訪れた昔の旅人はみずみずしさを覚えたことだろう。



昔の人はなんて心が豊かだったのだろうと思う。

地元が一番の宝は人

熊野古道に流れる悠久の時間を感じさせるガイドをしてくれる内山さんは、2008年にくまの体験企画を立ち上げた。オーダープランの「あなただけの熊野古道」をはじめ「女性一人旅応援プラン」、「熊野古道で過ごすLOHASな一日」、「ディープ熊野体験企画」など、数々の魅力的なエコツアアを行っている。

それらは、2000年に東紀

州体験フェスタが催された頃から知られるようになった熊野古道伊勢路への旅が、10年かけて進化した形と言っても良い。この10年は、内山さんにとっても古道を通して熊野へのまなざしを深める年月だった。

内山さんが熊野古道を歩き始めたのは2002年。体調を崩して名古屋からふるさとの尾鷲に戻り、体力づくりのため毎日馬越峠に通ったことがきっかけだ。その頃から熊野古道を歩きに来る人はいいて、あいさつや話を交わすと、ほとんどの人が道が合っているのか尋ねられた。また、おいしい魚を食べられる店など尾鷲の町のこともよく聞かれた。古道を歩きに来る人はいいたが、彼らが知りたい情報はなかった。内山さんはいろんな情報を盛り込んだ手書きのマップを作り、コピーして毎日馬越峠で出会う古道客に渡すようになった。

そうするうちに熊野古道が世



「熊野古道の旅から自分なりに思うことや気づくこと、ここでしかできない体験で得るものを何か一つは持ち帰っていただきたいですね。それでこそ忘れられない旅になるのではないのでしょうか」と語る内山さん。馬越峠で。

界遺産に登録されることになり、地元でもいろんな活動が起る。熊野古道の語り部が募集されたり、まちづくりの会ができたたり、イベントの実行委員会が立ち上がったたりした。内山さんは、馬越峠で出会った古道客の思いを地元で伝えたい一心で、それらの活動のほとんどに参加した。

そうしたつながりの中で、いろんな声がかかるようになる。熊野古道センターができる前は半年ほどその職員となり、熊野古道の植物調査や産業の資料作成を行った。その後、夢古道おわせができる体験学習コーディネーターとなり、尾鷲でさまざまな活動をする人を講師に呼んで日替わりの体験学習を8ヶ月間企画した。海洋深層水を使った染物体験など、体験学習のプログラムは100以上に。「地元でがんばっている人がこんなにいるんだ、人が一番の宝だと気づきました」。

熊野古道薬草弁当

熊野古道の道中では、地元の素材を用いたいろいろな郷土食の弁当が用意されている。紀北調理師会が出している「熊野古道薬草弁当」もその一つ。ハナミョウガやテンダイウヤクなど10種類前後の薬草が用いられ、食ても熊野の豊かさを感じられる。



江戸時代の旅人になった気持ちで歩く

こうした経験を経た内山さんが企画する熊野古道の旅は、単に自然や歴史を説明する型にはまった商品ではない。もつと訪れる人の心に寄り添い、その求めるものを満たそうとする旅だ。そのため、ツアー客に江戸時代の旅人になりきるイメージが湧くようなガイドをしてい

出合いがあるから旅をする

くまの体験企画のツアーのもう一つの大きな魅力は、地元の人との素敵な人たちと出合えることだ。

例えば、尾鷲市の三木崎につて元盛松という集落があった。自然環境が厳しいため昭和初期に廃村になったが、住んでいた人の子孫でその廃村を整備している人がいた。その人と知り合つて元盛松に行った内山さんは、そこにいるだけで当時の暮らしが甦ってくるような感動を味わった。他の人にも知ってもらおうと友人に声をかけて「紀伊半島みる観る探検隊」を結成。地元の人にも知らないような熊野の魅力を発掘し、そこに詳しい人を案内人をお願いして訪ねるようになった。友人だけではもつた住みないので公募するようにになり、やがてマスコミにも取り上げられ、定員15名のと

る。

「熊野古道の伊勢路は、江戸時代になって西国三十三カ所の巡礼たちが多く通つた道なんです。和歌山と比べて庶民たちが歩いた道なので、道中日記や地元で伝わっているお話がたくさんあるんです。その記録をひもとくとみんな人間臭い話ばかりで面白いんですよ。この馬越峠にさしかかつて何を思ったか。茶屋でどんなやり取りが

ころに100人以上が応募する大人気のツアーも。そのなかで参加者の反響が高いツアーは、「ディーブ熊野体験」など定番商品に加えられる。

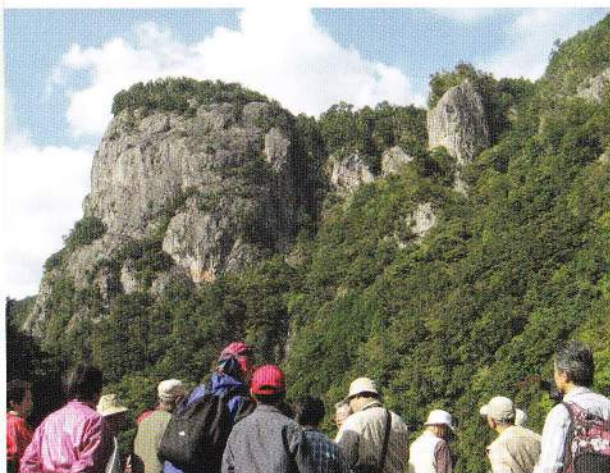
古道だけでなく、地元の小さな店や民宿など地域を巻き込むことも心がけている。例えば、江戸時代から尾鷲ヒノキが植林されている馬越峠を歩いた後、尾鷲ヒノキのアートクラフトを作っている工房に寄り、ヒノキのマイ箸作りを体験してお土産にしてもらう。「どこの地域にも素晴らしい人がいるのでしようが、その人たちと旅人が出会うきっかけがなかなかないですよ。ね。だから私は、地域と旅人の間に入っているんです」と内山さん。

くまの体験企画のツアー客は順調に伸び、現在ガイドは内山さんを含めて14人。うち7人は和歌山県に住むメンバーだ。例えば東京方面の客は、伊勢から本宮や那智山へ3泊4日などで

あつたか。言葉の端々から当時の旅人がこう思つたんだと想像するのがまた面白い。昔の人はこんな思いをして旅をしたんだと、昔の旅人と今の旅をしている私たちとをうまくならえて歩くことができるのが伊勢路の魅力です」。

くまの体験企画のエコツアーに参加するのは、30代を中心とする都会の女性が多い。「単に自然の中を歩きたいと思う人がいれば、都会に住んでいてストレスがあつて、どこか旅に出たいのだけどこかを見るだけの普通の観光はいやだ。もつと深い、何かを得るような知的探求を満たされるような旅をしたい。そう思つて熊野を選んだ人が、江戸時代の旅人の気持ちを感じることによつて、自分自身の生活を見直すようなきっかけにされる人が多いです」。単に楽しむのではなく、何かを求める旅。それは昔も今も変わらない、熊野にしかできない旅だと内山さんは考える。

訪れる人も多い。いきなり那智の滝に車で乗りつけるのではなく、道中で昔の旅人の思いを理解し、自分の思いを重ね合わせながら歩くことにより、那智の滝に着いたとき感動して立ち尽くしたりする。そんな心に宿る熊野に出会わせてくれる。



雄大な熊野の自然の奥深さに分け入っていく「紀伊半島みる観る探検隊」。地元の人にも知られていなかったり一人では行きにくかったりする場所を、冬から春にかけて訪ねる。その自然と共にある暮らしの営みも興味深い。



<くまの体験企画>尾鷲市林町9-28
090-7865-0771 (内山) <http://kumanokodo.info/>